



重症児者とともに生きる社会をどう語るか : 「重度重複障害総論」の講義づくり

渡部, 昭男

(Citation)

大学評価学会第19回全国大会

(Issue Date)

2022-03-05

(Resource Type)

conference object

(Version)

Accepted Manuscript

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009051>



大学評価学会第19回全国大会（龍谷大学）自由発表 2022.3.5

重症児者とともに 生きる社会をどう語るか

—— 「重度重複障害総論」の講義づくり——

1

渡部昭男（大阪成蹊大学／特別招聘教授）

1. はじめに

- これまでの発表
- テーマ「応答型講義づくり」

 鳥取大学・神戸大学での経験を第10回大会（2013.3@龍谷大学）で発表

渡部：大学における応答型講義づくりの試み

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/90001725.pdf>

- そのまとめ：2014『現代社会と大学評価』（9・10合併号）

渡部：大学における応答型講義づくりの試み

——学生の発達保障と大学教育のあり方——

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/90002862.pdf>

 その続報として、異動先（2020.4～）の大阪成蹊大学でのささやかな試み（コロナ禍による遠隔講義）を紹介したい

2. 重度重複障害総論

■ 重度重複障害総論（1単位）

* 特別支援学校教諭一種免許状の取得に必要な科目

* 2021年度受講者：免許状取得希望が約60人＋介護等体験代替扱いが約80人

* 講義概要（予稿集に第2～6回を添付）を配信した上で、全7回をZOOMでオンライン実施するとともに、ZOOM録画をアップしたオンデマンド方式を併用（YouTube「限定公開」にアップして受講生が視聴できるようにした）

* そうした環境のもとでの講義ではあったが、本学会の故・田中昌人初代共同代表（1932-2005）のいう「**学生の発達保障を可能にするような教育**」（田中2004：学生の発達保障と大学評価『21世紀の教育・研究と大学評価』〔シリーズ大学評価を考える第1巻〕2005晃洋書房）、**「これから50年先に向けて何を学ばなければいけないのかを考え」**るような講義（田中2005：新しい大学連合「関西圏」を考え、創出にあたる際のいくつかの基本視点『土割の刻』2007クリエイツかもがわ所収）を意識した

■ テーマ「重症児者とともに生きる社会」

* 特別支援教育科目としての内容をベースに「重症児者とともに生きる社会」を若者と語り合いたいという思いから全7回の講義を構想実施

①訪問教育児・医療的ケア児の 教育・生活とICT活用

- 特別ゲスト下川和洋氏（元訪問教育教員／NPO法人地域ケアさぽーと研究所理事）による研修講演

- <http://mcare.life.coocan.jp/profile/profiletop.htm>

- <https://www.nhk.or.jp/heart-net/article/521/>

- * ベテランの元訪問教育教師が
- * 自身の豊富な実践経験をもとに
- * 写真や動画をまじえて



第1部：訪問教育・医療的ケアの歩み

及び「豊かな教育・生活」という基本視点を

第2部：ICT活用の実践例をお話し下さった

- * 「Z世代」（1990年代後半～2000年代前半生まれのデジタルネイティブ世代）ともいわれる受講生から大きな反響があった

三原昌巳2021：非対面・インターネット調査を地域調査の手法に導入した地理教育の実践（日本地理学会発表要旨集 2021a(0), 90, 2021）

https://www.jstage.jst.go.jp/article/ajg/2021a/0/2021a_90/_pdf/-char/ja

②特別支援教育の教育課程の特色 (準ずる教育+自立活動、合科統合、スヌーズレン等)

- 重症児者を対象とした自立活動等の教育課程
- 1979年の養護学校教育義務化に続き、1980-90年代には希望者全員進学運動が展開されて、高等部の訪問教育制度化を待って**2000年（20世紀の最後の年＝受講生の多くが生まれた前後）に高等部希望者全入が実現**
- 21世紀の日本は、**どのように重い重症児者も希望すれば全員が12年間の学校教育を受けうる社会**となっている
- では、学校現場でどのように授業実践を創ればよいのあろうか
* 少人数集団で取り組む朝の挨拶、感覚運動遊び、**スヌーズレン（感覚刺激空間を用いて最適な余暇やリラクゼーション活動を提供する実践）**、小動物と触れ合う等

🏠 島田療育センター：スヌーズレン室 360度映像

<https://www.youtube.com/watch?v=pdG5-rJIWOU&t=7s>

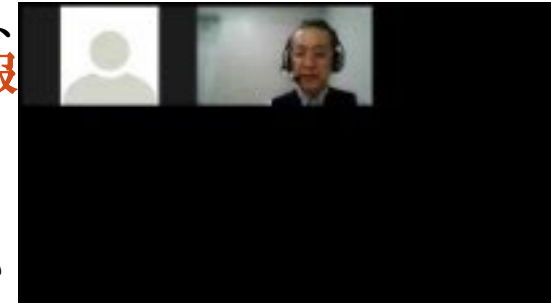
- 面白そう、体験したい、取り組んでみたい、という感想



③糸賀一雄（1914-68）の思想と実践

（TV録画「ラストメッセージ：この子らを世の光に」）

- 『糸賀一雄の最後の講義』（中川書店、改訂版2009）テキスト & レポート①1960年代の**限定的な「能力」観の転換・克服**
- <http://www.itogazaidan.jp/>
- 日本国憲法に「教育を受ける権利」が規定されたからといって直ちに全ての人に学校教育が実現した訳ではない
- 「能力」による差別や就学猶予免除は「当然」とする憲法解釈／社会通念を変えるには、重症児者の教育可能性、変容の事実を示す必要があった。**近江学園（1946年）・びわこ学園（1963年）での実践創造・蓄積の上に、糸賀は「問題児」「永遠の幼児」「不治永患」といった重症児観を超え出て、「人格発達の権利の保障（発達保障）」「自己実現」「横の発達」「この子らを世の光に」という思想に辿り着く。**NHKブックス『福祉の思想』を著した1968年、講演途中で倒れて帰らぬ人となる（享年54）
- 糸賀がいかに自己と対決し考えを変えていったのか（**事情磨練**の教え「行動や実践を通して知識や精神を鍛え上げること」）を、TV録画の視聴で追体験して貰う
- 自然災害と異なって**格差差別は人間社会が惹き起こすものであり、その軽減解消もまた人間社会によってなされる**ことを伝えたいとの思いから
- この後、受講生はテキスト（最後の講演録）をもとにお気に入りのフレーズを書き出す「**マイ語録**」作成へと進む。レポート①は半世紀以上前の糸賀の語り現代の若者が少しも古臭いと思わずに共感する箇所が発見に繋がり、極めて興味深い。



④ 重い障害を生きるという (TV録画「抱きしめてBIWAKO」)

- 高谷清 (1937-) 著『重い障害を生きるということ』
(岩波書店、新書2011) をテキスト&レポート②

■ <https://www.nhk.or.jp/hearttv-blog/3400/252181.html>

- **重症心身障害の状態**で人生を生き生活している人
たちについて知る

- 1978年(糸賀が亡くなって10年、養護学校義務化の直前)にあった「抱きしめて**BIWAKO**」(1周約250kmの琵琶湖を手をつなぎ抱きしめるといふ企画)の動画をまず視聴する(高谷園長も登場)。この企画の背景にある第一びわこ学園移転計画には「医療のある『ふつうの生活』を社会のなかで」という理念があり、いのちが大切にされる社会への思いが共有されて25万人もが集まった

- 高谷本は、生きているには「かわいそう」かとの問いに対して、**重症児者が生きているのが快適で喜びとなるような施設・地域・社会づくりの方向性**を示している

- 第3章は**重症心身障害児施設の誕生と創ってきた人たち**を扱っており、世界的に稀有な**重い心身障害のある子に対する特別な取り組み**が日本になされたことの意味を明確にしてくれる

- このことに重ねて、「無から有へ/私から公へ」、すなわち誰かがたづねなければ「無」のままであり、**私**的でも始めたものが「公」的な営みになっていく過程を伝えたいと思った

- ポート②は、高谷本のどこになぜ興味をもったかを書き出す作業



⑤ 〈ヨコへの発達〉とは

(TV録画「ある訪問教育教師の記録(西村圭也)」)



- 垂髪あかり著『〈ヨコへの発達〉とは何か』
(日本標準、ブックレット2020)をテキスト&レポート③
ヨコへの発達とはなにかを学ぶ講義
- TV録画「ラストメッセージ：この子らを世の光に」の映像(びわこ学園における戸次[べっき]さんの粘土を使った療育)によって「ヨコへの発達」のある程度のイメージは受講生にもある。問題は、垂髪本の「おわりに」で述べられている「**もっと子どもの内面に寄り添いたい**」「**子どもの心が見たい**」という糸賀らの思いを、**受講生がリアルに実感できるかどうか**であろう
- そこで、ため込んだ教材用動画の中から、奈良県立明日香養護学校で訪問教育を担当した西村圭也先生(1942-2021)のTV録画を選んでみた。**重症児者に相応しい新しい文化の創造を目指す立場から、一人一人の子どもにテーマソングを創作し、アコーディオン持参で音楽を奏で、バランスボールや手遊び活動で身体と心を揺さぶり、椅子文化を保障したいとオリジナルな椅子を作る様子が記録されている**
<https://ci.nii.ac.jp/nrid/9000002663668>
- **内面に寄り添いたい、心が見たいという一教師のひた向きの姿から、重症児者にまだ出会ったことのない若者も何かを感じ取ってくれている。その気づきを書き留める作業がレポート③の課題である。**

⑥重度重複障害児の授業づくり

(授業録画「人形とあそぼう(亀岡分校)」)

- 渡部「重症児の授業づくり」(『重症児教育：視点・実践・福祉・医療との連携』クリエイツかもがわ2004)をもとに、**重症児の授業づくりのあゆみ**を整理
京都府立丹波養護学校亀岡分校の授業録画「人形とあそぼう」を視聴して**授業づくりの実際を学ぶ講義**(最初の2分ほどミュート解除忘れ)



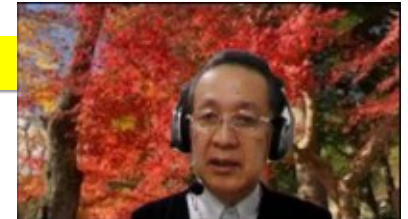
- 同分校では、教育階梯1(ほぼ乳児期前半の発達的特徴に該当)では「からだ」「みる・きく」「ふれる・えがく」「うた・リズム」の4領域で、教育階梯2(ほぼ乳児期後半の発達的特徴に該当)以降では「からだ」「みる・きく・はなす」「ふれる・えがく・つくる(・しごと)」「うた・リズム」の4領域で授業づくりを進めている
- 「人形とあそぼう」は、歩行可能なクラス(男3人、女2人)の「みる・きく・はなす」「うた・リズム」を合わせた60分間の授業である。**4人の教員がメイン指導・サブ指導の役割を巧みに交代しながら、「はじめの会、トラさんと一緒にあそぼう、ミヨちゃん人形とあそぼう、みんなで合奏しよう、おわりの会」の5つのパートを繋げていく授業**である
- 受講生は**息の合ったチームによる授業づくりを通して、生きているのが快適で楽しくなるような重症児の授業の可能性を体感**する

⑦重症児者及び高齢者とともに生きる社会 (動画「KIDS LOCO PROJECT 重症児が主体的に動くことを保障する活動」／「デンマークの高齢者福祉」)

- Kids Loco Projectの**重症児が主体的に動くことを保障する活動**と、
①**人生の継続性**、②**生活の自己決定**、③**残存（保有）能力の活用**という3つの原則に立った**デンマークの高齢者福祉**を通して、
第1～6回の講義も踏まえつつ、**重症児者及び高齢者とともに生きる社会をどう展望するか**という、締めくくりの講義

- **第2回糸賀一雄記念しが未来賞KidsLocoProject：重症児が主体的に動くことを保障**

👉 http://www.itogazaidan.jp/kinen/kako/mirai/21_kids_loco_project.htm



- 📖 理学療法士：高塩純一氏 <https://iss.ndl.go.jp/books/R000000016-I007308831-00>

* 糸賀一雄の思想に触れながら私（高塩）が行ってきた重い障害のある人たちでも、その人たちなりに主体的に身体を動かすことにより見えてきたことを紹介できれば・・・

- **デンマークの高齢者福祉：高齢者が主体的に暮らすことを保障**

👉 動画自立した暮らし

👉 戦後70年・高齢者福祉 http://tvmatome.papa.to/32737_20150429_200000.html#google_vignette

岩手県沢内村から始まった日本の高齢者福祉・地域福祉

4. おわりに

全7回を終えて

- 「難しかった」という一方で
- 「面白かった」「とても有意義だった」「見方や考え方がものすごく変わった」「これから自分がすべき事、向き合うことが少しわかった」「ここで終えずに、さらに学びを進めていく必要がある」「自分たちは何ができるかを考え伝えていかないとけない」という感想もあった
- さらに、**「一番印象に残っているものは訪問教育」「糸賀さんの言葉も凄く印象に残(った)」「障がい者も一般人も育つ過程はまったく同じ」「ヨコの発達があることを知り、人それぞれ発達の仕方は異なると思った」「重症児と高齢者の関連性はないと思っていたが、全ての人に共通する考えだ」「それを広げていけば・・・最終的には全員が通る道へとなっていく」「さまざま人や団体が関与して、困難や壁を乗り越えたうえで今につながっている」「哀れむ存在ではなく、お互いに尊ぶ関係性を社会で築けたらいいな」といった記述もあった**
- 田中のいうような、「連帯した力を深く識っていく力」の発生を基盤にして、「創造的な価値をつくり出す力」を伸ばす、&「歴史的、社会的、創造的で、民主的な第一期の社会的自己」を形成するような大学教育のあり方を引き続き探究したい